

「国語の力」の成立過程 V

— 国語教育学説史研究 —

野 地 潤 家

八 (つづき)

3 石井庄司——「始めて垣内先生の文学概論の講義を聴くことが出来るようになったのは、自分の大塚学園に於ける第三年目の大正十一年四月からであった。既に多くの先輩たちから噂にきいて、た通り、その時間は全く感激そのものであった。先生の御講義は、始めにゆつくりと筆記のできるように、一節をお述べになり、次にその解説的の講義が続いた。これは筆記をせず、その要点だけをノートに書き留めることにしていたが、此の折こそ自分の心は爽に多くのものを攝取したのであった。先生のお話からヒントを得て考えついたことも、その折々書き留めておいたが、爽に『みのり豊かな』時間であった。

吾々のクラスの者は多く先生の講義に引きつけられて行った。就中、故天野博治君はその随一なものであったろう。天野君が白木屋の洋書部にモオルトンの新著^{ニュー}したことを報じ、放課後匆々一緒に日本橋まで買いに走ったのもあの頃であった。吾々の学園生活もい

よ／＼終りになろうという大正十二年の春からは、天野君等が主唱で、先生にお願いしてモオルトンを読んで戴くことにした。有志だけで、特別の時間をきめてであった。それがたしか月曜日の午後三時から五時までであったと思うが、或時は、信州地方への御講演の帰途、夜行で上野へお着きになったまゝ、まだお宅にもお帰りにならないという日でも、『このモオルトンの時間だけは休みたくない』と仰言つて下さったときなど、若き吾等は全く感泣したものであった。この特別講義の御礼のしるしに何か先生に差しあげたいというので、有志の者がほんの少しの醜金をして、どこかのデパートで、陶器を買って、四谷のお住居に持参した。安もの陶器、今考えると全く冷汗の出るものであるが、これが先生の御宅に伺った最初であった。」(雑誌「国語教室」、第四巻第一号、昭和13年1月号、一八べ)

3' 石井庄司——「大正十一年四月、本三になって自分等は待望の垣内先生の文学概論と国文学史の講義を聞くことができた。その

頃、英語は土居光知先生にブラウニングの詩などを習っていたが、両方の先生からモウルトンの書物の話をきいた。そこで級友の数人を語らうて、垣内先生に、その編講のことをお願いしたところ、心よく御承引下され、当時、講師であった先生が、わざわざわれら数人のために、何曜日かの二時間をあてて、モダン、スタディ、オペリタラチュアを講義して下さった。きまされた文学概論や国文学史の方はよく休講となったが、このエキストラのモウルトンの方は、かえってお休みがなかった。あるときなど、『今旅先から上野駅に着いてここへ駆けつけた』とちよつと仰言ったことがあった。この時は、よくわからなかった。しかし今日になって、つくづくと思ひ出されることであつた。」(雑誌「実践国語」、第一三卷第一四七号、昭和27年11月1日、穂波出版社刊、一〇四—一〇五)

4 渡辺 茂——「現在の私は、『垣内先生と私』というような題で過去の生活を省るほどの時間的距離をその過去に発見することは困難である。しかし強いて過去の思出を語るなら、あの『国語の力』の出た時の感激である。当時(大正十一年)東京高師に入學したばかりで国文学の研究法に疑問を抱いていた私は、此の書に依つてどれほど国文学に対する研究情熱を鼓舞されたかわからない。それから特に御指導を仰ぐようになり、外国の文学研究法に関心をもちつつ国文学の研究法を考察して今日に及んだ。生徒及び学生時代に参加した先生のゼミナールで最も印象の深いのはモウルトンやマールホルツ、それからチザルツやベターゼンやワッハ、更にカシーラーやエルマーチンゲル等の学説についての批判であつた。早いもので先生に教を受けるようになってからもう十四年ほどになる。

(昭和一二、一三、五)「雑誌「国語教室」、第四卷第一号、昭

和13年1月号、一七—一八)

5 熊沢 竜——「(前略)高等師範へ入つて二年目の四月、始めて先生の講義をきいて、完全に魅了され、授業が終つた時、暫く声も出なかつた。やがて、そこそこで、うめくように嘆息がもれ始めたのである。

文学が好きな所から、国語専攻の文科二部に入ったものの、この一年間ひからびた講義ばかり聞かされて、幻滅にすっかりきつていた私達だつた。そこへ先生があらわれたのだ。講義は文学概論だつたが、この日は国文研究のあり方について、ノートなしに縦横に抱負を語られ、国文学界の現状を、『テキスト・クリティック以上一步も出ず。』と痛快にやつつけられ、私達日頃の憤懣を一氣に吹きとばしてくれたのであつた。講義は一年間つづいた。中学や師範を出たばかりの私達にとつては、先生の講義はむづかり過ぎてよく解らなかつたが、清新な内容と先生の情熱が私達をぐんぐんひっぱつて行つた。

二年目から先生の講義は文学史にvari二年間つづいた。文字の生まれぬ以前の合唱時代についての御意見が印象的だつた。私は自分の幼年時代を振り返つて、ものを書けなかつた頃の言語生活について考え、学校へ入つて綴方をやり、更に少年雑誌への投稿時代に至る経過を反省して小論をものし、レポートとして呈出した。先生は最大級の讃辞で私の努力に答えて下さつたのを今も光榮に思つてゐる。」(雑誌「実践国語」、第一三卷第一四七号、昭和二十七年一月一日、穂波出版社刊、八四—)

6 宮西一積——「私が東洋大学へ這入つた頃、垣内先生は欧州から帰朝、英文学の田部重治先生と文芸研究会を指導して居られた

ので、私は其の傘下に馳せ参じ、都下の大学、専門学校、新聞社、雑誌社、同好者等に呼び掛けて一大勢力をなした。文芸運動のお手伝いもした。

学校を出てから私は郷里の丸亀中学に勤めたが、先生は香川県下の国語教育指導の爲に来られ、戦士の様な情熱を以て形象理論を講じ、非常な感銘を与えられた。私は先生をお宿に訪うて記念写真をとり、高松の港にお送りして強い握手を受けた。モウルトンを紹介されたのは、この時であった。」(雑誌「国語教室」、第四巻第一号、昭和13年1月号、二四—二五頁)

6' 宮西一積——「私が東洋大学に入学した頃、垣内先生はヨーロッパから帰朝せられた早々で、長身広額さつそうたる身なりをした、如何にも教授らしい風貌を講壇に運ばれ、明晰な頭脳をもって学問の曠野を切り開いて行かれた。その彼方には、先生をよく使われた、希望に輝く『緑の丘』があった。

当時先生は確か『文学論』を講せられて居たと記憶して居る。『啓示の神性』等と云う言葉が頭に残って居るが、その講義ノートも未だ大切にしまつて居る筈なので、大急ぎで書庫を探して見たけれども、一寸見つからないから、その内容について詳しく書くことの出来ないのは残念である。

しかし新しい思潮と、卓抜なる研究方法で構成された理論を講ずるに、燃ゆる様な情熱——寧ろ殉教的な——をもつてし、若い学徒を魅了せずにはおかなかつた点は、今も尙私の印象にまざまざと残って居る。

その頃私の学校には東洋大学文芸研究会なるものがあつて、東西文芸思潮の研究を目的とし、毎月一回名士を聘して公開講演をし、

夏季には風夜二回に亘つて、各大学の学生を初めとして、一般文化人のための文芸講習会を開催し、非常に関係方面の関心を集めていた。先生と英文学の田部重治先生は、その指導教授として、能くお世話をして呉れた。」(雑誌「実戦国語」、第一三巻第一四七号、昭和27年11月1日、穂波出版社刊、六四—六五)

以上の、1 谷鼎、2 池田亀鑑、3 石井庄司、4 渡辺茂、5 熊沢竜、6 宮西一積の諸氏による聴講回想によつて帰朝後の垣内先生の講義態度・講義状況を知ることができる。なかでも、石井庄司博士によつて述べられている、モウルトン論講のことには、注目に値いする。モウルトン教授と学生から呼ばれていた垣内先生の演習への熱意も、うかがえるであらう。

また、諸氏によつて印象深いこととして回想されている、垣内先生の熱情のこもつた、迫力に満ちた講義よりは、単なる教室の講義の問題におわたつたのではなく、「国語の力」成立の底流となり、背骨となつてゐると考えられる。

垣内松三先生とモウルトンならびにモウルトンの所説との関係、ならびにモウルトンとゆかりの深かつた時期の垣内先生の講義状況については、右に見てきた通りである。

九

つぎに、「国語の力」とモウルトン著「文学の近代的研究」との関連について、考察を進めたい。

モウルトンは、「文学の近代的研究——文学の理論及び解釈の序論——」の「序」において、

「今まで四十年以上にわたつて、私の生涯は、文学を教授することに、すっかり捧げられて来た、半ばは大学の教室において、半ば

は大学科外講義のアトラクティブな世界において——そしてここでは我々は受容力があると同時に成熟した学生に出会う。文学のこの研究に形を与えることに幾分の貢献をするということは常に私の宿望であった、何となれば、それは伝統によって、それほど雑多で、且つ組織されていないからである。これまでの私の著作は予備的研究であり、特殊の文学の分野に適用される特別の原理についての論究であった。その研究の最も明白な欠陥は、他の如何なる種類の批評にとつても、その基礎とならなければならぬ帰納的觀察のインスティンクトが欠如していることである。」(本多顯彰訳、昭和7年11月15日、岩波書店刊、二べ)と述べて、自己の文学研究を反省し、同時にその著作ごとに意図を説き、「私の最後の仕事は、文学の世界全体を、個々の特殊の文学の集合としてではなく、英国人の立場から展望された『世界文学』の概念によって把握しようとする企てであった。」(同上書、三べ)と述べている。

なお、モウルトンは、本書の読者に関して、「本書を書くに際し、私は、絶えず、これを大学並びに学校の教室において実用に使われるようにするという目的を念頭から去らせなかった。私は、亦、これを、一般読者にも興味あるものたらしめようと努めた。そして、私が最も尽したく思う読者は、大学卒業を、決勝点としてではなく、全生涯の余暇を充すべき教養の出発点として認めた人々である。」(同上書、四べ)と述べている。

本書の目次は、つぎの通りである。

序論 近代的研究の優勢なる觀念——統一、帰納、展開
第一篇 文学形態論、文学の多様とその根底に横わる原理

第一章 文学の形態の諸要素

第二章 文学の諸要素の融合

第三章 文学解釈の鍵文学的形態

第二篇 文学研究の分野と範圍

第四章 文学の分野の統一と世界文学の概念

第五章 文学の内的及び外的研究

第三篇 世界文学の歴史に反映したものとしての文学の展開

第六章 詩と散文との分化

第七章 叙事詩における展開

第八章 戯曲における展開

第九章 抒情詩における展開

第四篇 文学批評、伝統的混乱と近代的復興

第十章 文学批評の諸型とその伝統的混乱

第十一章 思索的批評——詩の基礎的概念と職能

第十二章 思索的批評——趣味の展開的理論

第十三章 帰納的批評または解釈的批評

第十四章 批評的意見の歴史

第十五章 判断的批評または製作制限の批評

第十六章 主観的批評、若くは文学として承認される批評

第十七章 文学研究に於ける批評の地位

第五篇 哲学の一様式としての文学

第十八章 思惟の一様式としての物語

第十九章 人生の批評としての文学

第二十章 人生及び自然の高級な解釈としての文学

第二十一章 文学の芸術と同様に重要な文学の主眼

第六篇 芸術の様式としての文学

第二十二章 文学の芸術の文法

第二十三章 詩的建築及び芸術的撰理としての筋フット

第二十四章 詩的裝飾比喩及び象徴の理論

第二十五章 文学的反響、第二の自然としての文学の概念

第二十六章 文芸に於ける一要因としての言語

結論 文学の伝統的並びに近代的研究

綱要

総索引

右のように、本書の内容は、序論・結論のほか、六編二十六章から成っている。

これらのうち、埴内松三先生によって、「国語の力」の中に引用されているのは、つぎに掲げる通りである。

一 解釈の力

1 「その石や瓦の間から青い草がぼつ／＼芽を出して来る。たとえばモウルトンの『文学の形態学的研究』の如きもその一つと見ることが出来る。こゝに謂う所の『形態』は形式でない。形態学的研究の対象は形式に対して考えられて居る内容の『形象』である。

少なくともモウルトンの企てた態度にはこれまで欧米に伝襲して居る文芸復興期以来の文法及修辞学等を破壊して、新しい研究の基礎を据え付けようとする跡は充分に見えて居る。唯遺憾に思うのはそれはもっと地盤の底から掘り返して基礎を固くしなければならぬのであるのに、地盤が堅められて居ないために其の建設が確実と

ならぬことである。」(有朋堂版「国語の力」、一 解釈の力 一 三 解釈の新傾向 四〇—四一—)

1' 右の部分は、モウルトンの「文学の近代的研究」からの直訳の引用ではない。モウルトンの取り上げた「形態」と、それを中心とした研究態度について論及されているのである。モウルトンは、「形態」について、つぎのように述べている。

「この第一篇の題目は文学的形態論、即ち、種々の文学的形態と、その根底に横わる原理とであった。これら種々の形態は、我々が今見た如くに、解釈における主要な要因である。この問題の伝統的取扱いは、古典的過去の死んだ手が、唯一度或る型を定め、それを後の時代の作家が守らなければならないかのうちに、これら文学的諸形態を静的であると囁々考えて来た。これは『種類についての謬見』で、これが批評史に繰り返し現われ、そして、繰り返し覆されて来た。文学における形態は展開の事であり、文学が前進するにつれて新しい形態が現われて、より古い形態が変更される。形態の六つの要素——叙事詩、抒情詩、戯曲、歴史、哲学、雄弁——は、それに特殊の作品が帰せらるべき、互に排他的の、文学の六つの種類ではない。化学の元素のように、これらは特殊の作品の中で結合することが出来て、これら諸要素の融合は文学的効果の源となる。読者が読むところのものに対して取る態度は解釈者の態度である。彼は、先ず、眼の前にある文学と一般文学とに徴して、その根底に横わる形態の解釈を試みなければならない。彼はその時、形態が意味の解釈を助けることを見出すであらう。」(本多顯彰訳「文学の近代的研究」 第一篇 第三章 文学解釈の鍵文字の形態 八六一—八七—)

2 「前に述べたように解釈の意味が広い意味に解せらるゝようになつて来たのは、その自然の結果であつて、而してその解釈の鍵が形態の研究に置かるゝのもそれを示すものであるといつてよい。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 一五 解釈法と批評法との関係 四三六)

2' ここには、モウルトンの名前は出されていないが、「文学解釈の鍵文学の形態」というモウルトンの研究を指していると思つて可からう。

3 「作品の研究の實際に於ては演繹的批評主義論と帰納的批評主義論との二に分つて考えることができる。近來に至りてこの両方面が次第に接近しつゝあつて、たとえばモウルトンが、『解釈の批評主義論』という唱導の中には、この両方面の融合が意識せられて居り、『批評主義論の改造』ともいふ語の中にも、その希望が現われて居る。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 一七 批評主義論と批評方法論 四六六)

3' 「解釈の批評主義論」については、第十三章 帰納的批評または解釈の批評 に述べてある。その末尾には、「批評の伝統的概念が判断と同義語であつた間は、文学史は批評に打ち勝つ文学の勝利であつた。文学に対する近代的態度は、評価と判断とを除外しない。しかし、それは、判断の批評が、最も自由な帰納的吟味の過程によつて先行されなければならないといふこと、及び、かくして、批評における最も基礎的な要素は、解釈の批評であるといふことを認める。」(本多顯彰訳「文学の近代的研究」 第四篇 第十三章 帰納的批評または解釈の批評 三四七六)と述べられている。

4 「この要求から考へる時にモウルトンが『天文学者の観測が

個人差や機械の精粗なために差異が生ずるよりに別の人が見たら異つた解釈が生ずることはそれはあり勝ちのことである。それではそれを決するには、いかにしたらよいかといへば、唯一言で答へることが出来る。それは Fresh observation だ」といふ心もちも解つて来る。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 一八 帰納的批評法 四九六)

4' 「最も実証的な科学においてすら、外自然の細部は、別々の観察者に別々の印象を与えるであらう。その結果、天文学は『個人的誤り』若くは、『機械の誤り』を斟酌しなければならぬ。しかし、彼はこの種の諸困難を如何に処理するか? 新鮮な観察によつてである。文学のすべての取扱ひにおいて、人によつて異なる主観的印象は、困難な問題である。しかし、帰納的解釈者は、観察しつゝある文学に幾度も繰り返し訴へることによつて、その困難に處する手段を持つ。」(本多顯彰訳「文学の近代的研究」 第四編 第十三章 帰納的批評または解釈の批評 三一三)

5 「又作品の批評から出立してそれを材料として、作品に示されたこと、示されなかつたこと、示さなければならぬことを考えようとする態度がある。自由主観的批評主義 Free and subjective criticism といふものがそれである。批評から創作へ進むのである。作品の研究から別かれて次第に創作の方向へ紛れ込む傾向は、批評家の個性が鮮明であるほど明かに主観性を帯びて、批評の形をしながら創作の性質を帯びて来るのである。これも批判的批評主義論と同じく、こゝにいう批評の意味ではない。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 一七 批評主義論と批評方法論 四七七八)

5' 「この語（引用者注、「主観的批評」を指す。）は、批評の一分派をあらわすのではなくして、特殊の見地から考察される批評的著述の全体を云い表わしている。批評は文学を討議する文学である。他の諸々の型は、その見地として、討議される文学を持つ。主観的批評は、批評家に興味を持つ。批評家は作家となる。主観的批評は、この作家の、文学に対する寄与である。」（本多顯彰訳「文学の近代的研究」 第四篇 第十六章 主観的批評、若くは文学として承認される批評 三七二―）5には、モルトンという語はないが、本書のこうした考え方をふまえて論が進められているようである。

6 「（前略）、モルトンのいうごとく帰納的批評法は『解釈の批評主義』であって、解釈は仮定に終るのでなく仮定の連続の上から無限に進展する作用である。」（有朋堂版「国語の力」 一 解釈の力 一八 帰納的批評法 五〇―五一）

6' 「かような解釈の批評は、帰納的である。帰納的方法の精髓は観察、暗示された説明、及び、新鮮な観察による説明の立証、である。第一に、文学作品の内容は、その最も細い部分に至るまで質疑され、而もそうされるのは細部それ自身の為ではなく、共通の説明の中におけるそれら細部の調和若くは統一の目的をもってである。第二に、これら結果として起る説明は常に仮のもの——専門的に云えば仮説——であって、いつでも容易に、より広い説明に基礎をおくところの結果に地位を譲るものである。

基礎公理。——文学に於ける解釈は仮説の性質を持ち、それは、それが、文学作品の内容を説明する程度によって査定される。」（本多顯彰訳「文学の近代的研究」 第四篇 第十三章 帰納的批評ま

たは解釈の批評 三〇八―三〇九）

7 「文化意識の統一から文学を批評する作用にはこの考え方があつた。その一は文学の展開を文化の自叙伝と見ることから、歴史的識見を精練して作品を批評せんとする態度である。」（有朋堂版「国語の力」 一 解釈の力 二〇 思索的批評法的一面 五三）

7' 右のうち、「文化の自叙伝」という語句に關しては、モルトンは、つぎのように述べている。

「即ち、国民文学は、その国民の自叙伝であり、それ自身の最上の声で直接に我々に話しかけるところの、その国民の歴史である。そして世界文学は、文明の自叙伝である。」（本多顯彰訳「文学の近代的研究」 第五篇 第二十一章 文学の芸術と同様に重なる文学の主題 四二五）

8 「思索的批評主義の他の一態度は、文学の本質を思索してその立場から作品を批評する態度である。而して文学の本質は何であるかという疑問に答えて、神といふ生命といふ人性といふも、それは何であるかと問えば語に窮せざるを得ぬ。」（有朋堂版「国語の力」 一 解釈の力 二一 思索的批評法の他の一面 五五―五六）

8' 「我々が今始めようとしている題目は、普通に文学の哲学と名づけられて来たところのものである。私はこれを思索的批評と呼ぶことにしている。文学の哲学を構成するに足るだけの一般的承認を得ているところの、広く体系化された思想の本体があるということとを、私は理解することが出来ない。『思索的』なる語は、かような哲学へ向う前進の試験的及び一時的段階を暗示する。それは人が哲学する二つの方法——演繹及び帰納——のどちらにも適合する。」

（本多顯彰訳「文学の近代的研究」 第四篇 第十一章 思索的批評——詩の基礎的概念と職能 二六一—二六二）

9 「又モウルトン等の唱える『世界文学』の概念もここに著眼点を置くことができる。」（有朋堂版「国語の力」 一 解釈の力 二一 思索的批評法の他の一面 五六—）

9' 「諸文学の集合—全世界の文学」を区別せよ。
文学の統一—世界文学

重要な点は個々の文学の単なる集合ではなくして文学の統一である。（中略）我々は、現存のすべての文学の総計に与えられた名称に過ぎないところの全世界の文学と、我々が世界文学と呼んでもよいところのものとの間の区別をしなければならぬ。後者は与えられた見地から、多分読者の国民的文明の見地から、遠近法の仕方によって見られた全世界の文学である。」（本多顯彰訳「文学の近代的研究」 第二篇 第四章 文学の分野の統一と世界文学の概念 九一—九二）「そして、世界文学には文明の歴史が反映している」「世界文学は歴史の統一としての文学的材料を提出する。」「世界文学においてのみ文学の一代記が完全に表わされることが出来る。」（同上書、一〇四—一〇五）

10 「文学の歴史に於ては、常に創作が批評を打負かして歩みをつづけて居る。鑑定だけを除いて其外の人は誰でも芸術を理解する」という反語は、この場合にも思い合わせられる。」（有朋堂版「国語の力」 一 解釈の力 二一 思索的批評法の他の一面 五七—）

10' 「批評の伝統的概念が判断と同義語であった間は、文学史は批評に打ち勝つ文学の勝利であった。」（本多顯彰訳「文学の近代

的研究」 第四篇 第十三章 帰納的批評または解釈の批評 三四七—）

10' 「（前略）、文学を正確に理解する過程は、判断的観念からの攪乱がある間に行われることが出来ないというのである。そこから、ホガースの逆説が起ってくる——鑑識家を除くすべての人が絵画の判断者である。」（本多顯彰訳「文学の近代的研究」 第四篇 第十三章 帰納的批評または解釈の批評 三四七—）

11 「故に帰納的批評が克明に内へ内へと向うように、思索的批評は平静に作品の展開に随伴する作用であらねばならぬ。この両方に通じて最も忌むべき点は、研究の中途に於て作品を離れて、聯想錯誤に迷い込むことであつて批評と創作との糾はこゝから生れて来るのであろう。」（有朋堂版「国語の力」 一 解釈の力 二一 思索的批評法の他の一面 五七—五八）

11' 「私は今一つの謬想を挙げ、それを常識謬想として云い表わしたい。我々は、時に、帰納的解釈に対する偏見が、常識は如何に解釈者が詩の大家の單純性の中に複雑な空想を読んだかを、見ることが出来る」と規定することによって、述べられているのを見出す。さて、文学の解釈者が屢々彼等が解釈する文学の中に、彼等自身の空想を読んだということに本當——驚くばかりに本當——である。けれども、これをなすことは帰納的批評ではない、いや、それに反して、帰納的批評に悖る最も大きい罪である。」（本多顯彰訳「文学の近代的研究」 第四篇 第十三章 帰納的批評または解釈の批評 三四五—）

なお、モウルトンは、文学解釈をおびやかす誤謬について、①寓話化する謬見、②前後撞着の謬想、③より優れた人物の謬想、④作

者謬見、⑤芸術及び自然の謬見、⑥種類及び程度の謬想、⑦法及び違反の謬想などを挙げて説いている。

12 「古人がてにをはの一字の意味にも苦心して、周到な用意を以て、解釈を試みたのは、この一字の上に文の全意と關係する生命が宿つて居ることを知つたからである。かゝる用意を以て解釈する時に始めて、作者が誓こうと思つたことをどこまで書き得たかといふことが考えられて来る。こゝに解釈の上に於ける演繹と帰納の融合せらるゝ要点がある。前に挙げた *Uneasy lies the head that wears a crown.* を『冠を戴く頭は安きひまなし』と訳する作用はこゝから生れて来るのではあるまいか。モウルトンが『解釈の批評主義論』を主張する着眼点もこゝに在ると見ることもできるのである。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 二五 解釈の着眼点(二) 七二—七三)

12' 「帰納的方法の精髓は観察、暗示された説明、及び、新鮮な観察による説明の立証である。第一に、文学作品の内容は、その最も細い部分に至るまで質疑され、而もそうされるのは細部それ自身の為ではなく、共通の説明の中におけるそれら細部の調和若くは統一の目的をもつてである。第二に、これら結果として起る説明は常に仮のもの——専門的に云えば仮説——であつて、いつでも容易に、より広い説明に基礎をおくところの結果に地位を譲るものである。」(本多顯彰訳「文学の近代的研究」第四篇 第十三章 帰納的批評または解釈の批評 三〇八—三〇九)

13 「モウルトンが詩の韻律は *Recurrent rhythm* であり散文の韻律は *Vellied rhythm* であるといふように、詩文の内には生命の律動が内聴されるのであるから、文の解釈の上から最も作者の

心に近づくものは、文に潜む想韻の流動を内聴することであるといふことができる。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 二六 解釈の着眼点(三) 七六)

13' 「散文と韻文との区別は、唯文学の表面に触れるのみである。それは律動の区別である。すべての文学は律動的であるけれども、そこに相違がある。韻文の律動は、回帰的律動であつて、つとめてその点に注意を払う。散文の律動は、これに反して蔽われた律動である。」(本多顯彰訳「文学の近代的研究」第一篇 第一章 文学の形態の諸要素 一三)

13'' 「私は、本書の第一章において、散文と韻文との間の基本的律動の区別に注目した。散文は蔽われた律動であり、韻文は循環的律動である。」(本多顯彰訳「文学の近代的研究」第六篇 第二十六章 文芸に於ける一要因としての言語 五四八)

以上のように、「国語の力」の「一 解釈の力」には、モウルトンの「文学の近代的研究」からの直接・間接の引用が一三例も見られる。

「国語の力」の第一章ともいへば、「解釈の力」は、その語の示すように、「解釈」の問題を中心主題としつつ、「説方」・「批評」の両面にも周到に配慮して、真の解釈の力をあきらかにしようとする試論である。その内容は、

一 説む方

二 説方の本質

三 説方・解釈・批評の実際

四 解釈の力

二 センテンス・メソッド

六 「センテンス・メソッド」から見た読方の現状

七 「センテンス・メソッド」の実際

八 実際より見たる考察(一)

九 実際より見たる考察(二)

一〇 センテンス・メソッドの理論的基礎

三 一 解釈法

二 内容と形式

三 解釈の新傾向——(1)

四 センテンス・メソッドと解釈法との比較

一五 解釈法と批評法との関係——(2)

一六 批評法

四 一七 批評主義論と批評方法論——(3) (5)

一八 帰納的批評法——(4) (6)

一九 思索的批評法

二〇 思索的批評法の一面——(7)

二一 思索的批評法の他の一面——(8) (9) (10) (11)

二二 帰納的批評法と思索的批評法との関係

五 二三 説書の力

二四 解釈の着眼点(一)

二五 解釈の着眼点(二)——(12)

二六 解釈の着眼点(三)——(13)

二七 解釈の三方面の統一

二八 解釈の有機的統一

のように構成されている。

各項の下に記入したのは、さきに掲げた、「国語の力」における引用例である。これによって見ると、そのほとんどが「解釈法」・「批評法」の問題の考察に集中しているといつてよい。

これらの引用を、モウルトンの「文学の近代的研究」について見ると、つぎのようである。

第一篇 文学形態論 文学の多様とその根底に横わる原理

第一章 文学の形態の諸要素——(13)

第三章 文学解釈の鍵文学の形態——(1') (2')

第二篇 文学研究の分野と範囲

第四章 文学の分野の統一と世界文学の概念——(9')

第四篇 文学批評、伝統的混乱と近代的復興

第十章 文学批評の諸型とその伝統的混乱

第十一章 思索的批評——詩の基礎的概念と職能——(8')

第十二章 思索的批評——趣味の展開的理論

第十三章 帰納的批評または解釈の批評——(3') (4') (6') (10') (11') (12')

第十四章 批評的意見の歴史

第十五章 判断的批評または製作制限の批評

第十六章 主観的批評、若くは文学として承認される批評(5')

第十七章 文学研究に於ける批評の地位

第五篇 哲学の一様式としての文学

第二十一章 文学の芸術と同様に重要な文学の主題——(7')

右の各章下に記入したように、四篇七章から引用されている。その中心は、第四篇の文学批評を扱ったものからの引用で占められて

いる。

「国語の力」の「一 解釈の力」においては、「解釈法」を中心としながら、「説方」(とくにセンチナス・メソッド)と「批評法」の問題をわざわざ考えていく態度がとられている。そのため、「説方」(とくにセンチナス・メソッド)については、ヒューイや国内の実践事例などによりながら、考察が進められ、「解釈法」については、エルチェの「研究法」(解釈法・批評法)の批判的克服を志向しつつ、モルトンが取り上げられたのである。さらに、「批評法」の問題についても、モルトンの考究している、「思索的批評」・「帰納的批評」(解釈の批評)・「主観的批評」などをふまえて、それらによりつつ述べられている。(垣内松三先生は、「批評主義論」の語を用い、本多顯彰氏は、「批評」の語を用いている。)もちろん、垣内先生は、モルトンの文学の形態学的研究に対して、その清新さを認めつつも、地盤の固めかたがじゅうふんでないという批判をされている(前掲、引用例1、参照。)

モルトンの「解釈法」・「批評法」からの引用も、「説方」・「解釈」・「批評」を同一本質のものとし、「解釈の力」をあきらかにしているところとする自主的立場からなされているのである。また、垣内松三先生は、「エルチェ式研究法は研究史の或る時期には一度経過しなければならぬ研究法の原理であるが、研究が或る程度まで進んで来るとそれは却って研究を拘束するように考えられる。而して研究の方針を新たにしたい新しい研究法の建設を要求するのである。」(有朋堂版「国語の力」三九六)と考えて、その立場からの「解釈法」(「批評法」)の新しい建設を志向されたのである。したがって、モルトンからの引用も、この志向の線に沿いうるものとして、なされている。モルトンも、言うようにという引用形式

(1、4、6、9、12、13)(細部の言いまわしは、すこしずつちがっているが)のとられていることも、そのことを示している。

なお、ついでながら、引用例4、7、10、13などは、垣内好みの巧みな引用のしかたといえよう。

モルトンの「解釈法」・「批評法」についての引用は、右に見たような、自主的・建設的立場で、自己の解釈観・解釈法の確立へ向かって、それらをふまえて、活用していくという態度でなされている。モルトンの所説の紹介とか説明とかに終わることなく、かなり自在にそれらを駆使して、論述が進められている。

しかしながら、この「国語の力」の中心部の一つ、「一 解釈の力」の章が、意欲的に構築されるにあたって、ヒューイの書物と並んで、モルトンの「文学の近代的研究」が大きい支柱になっている点は、見逃がすことができない。

モルトンは、近代的批評について、四つの型を識別し、つぎのように述べている。

「我々は先ず第一に帰納的批評を持つ。これは、解釈と展開的分類の目的で、あるがままの或る特殊の文学を吟味することである。これは他のすべての種類の批評に欠くべからざる基礎である。

勿論、裁判官的気質の批評家は、もし彼が、研究して来た文学を理解しなかったり、誤解したりしたならば、彼の評価または理論は地に墮ちるであろうということを認めるであろう。彼が多分気がつかないところのことは、かような純粹な解釈は、判断の観念を全然除外しているところの過程によってのみ可能となるということである。我々は、第二に、文学理論若くは文学の方向に向うところの思索的批評を持つ。第三に、承認された原理を個々の文学作品に適用

することであるところの判断的批評にとつての沢山の余地がある。しかし、如何なる種類でもの文学批評が、それ自身文学として取扱われて、その批評家を作家として表わす時に、第四の形が生ずる。

理論の一項目として許容されないかも知れないところのものが、それにも拘らず文学的実施によつて、高い興味と価値とを持つかも知れない。或る人々は、この自由批評若くは主観的批評は、すべてのうち最も重要な批評であると考へるであらう。批評のこれら四つの型は、ある特殊の討議において如何に混じていようとも、職能においてには明らかに別個である。伝統的批評は、これら四つの型のうちの唯一つのもによる批評の全分野の無意識的僭取であつた。批評の観念は、判断の観念に狭められた。そして判断の態度を除外しなければならぬところの解釈を容れるべき余地が残されていなかった。」

(本多顯彰訳「文学の近代的研究」、二五九―二六〇頁)

モルトンは、このように、帰納的批評をすべての批評の基礎として、四つの型の批評について、くわしく考察を加えている。それに対して、垣内松三先生の「国語の力」においては、帰納的批評法と思索的批評法との関係について、「批判的批評に陥らざる帰納的批評と思索的批評とは、作品の中に内在する能産の作用の逆行であり、随伴であるとするならば、この二つの作用は、その中道に於て相会するのであつて、帰納は演繹に伴い演繹は帰納と提携する。ここに於て批評法の両面が合一され批評の方法論が完備する。」(有朋堂版「国語の力」、五八頁)と述べられている。

モルトン・垣内松三両氏の所説の述べ方には、おのおの特色があつて、そのままあいかさなるものではない。垣内先生のほうが

るかに簡略化され、独自の見解としてまとめられている。その際、モルトンの所説は、有力な足がかりとなつているのである。

(昭和37年9月29日稿) (本学助教)